



イラクを訪ねて (1)

塙 輝 雄*

はじめに

私共、理工系に属する大学人の海外出張は殆んどアメリカ、ヨーロッパの先進国に向い、発展途上国に向う場合は稀である。確かに私共の意識下には自らを先進国とするには抵抗を感じさせるものがあり、止むを得ない面もあるが、発展途上国から見れば我々は先進国であり、好むと好まざるを問はず途上国に対する協力を推進せねばならぬ立場に立たされている。経済協力は経済侵略と受取られる側面もあり、政治的因子も大きいので長期的に見れば必ずしも効果的であると云えないが、学術、教育面での協力は相互理解を深める上で計り知れない効果があることは確かである。更に異質の文化と接触することは己れを知ることにもつながり、正しく“教えることは最良の学ぶ手段でもある”ので我々自身にとっても有益である。とは云うものの、我々の途上国に対する具体的知識は乏しく、ともすれば現地に行くことをためらわせ勝にさせることは否定できない。筆者は1975年春と、77年秋と2回イラク共和国を訪ねる機会があったが、旅行案内すら入手し難いこの国に初めて旅行した時の困惑を思い出すと、この地を今後訪れる人のため、知り得た知識を、たとへ断片的であっても記しておく責務を感じ、この小文を草することにした。

1. 中近東への旅

初めて中近東に仕事をもって旅立つ人は、バグダードに限らず如何なる都市でも直行便を利用すべきであるというのが第一原則で、もし乗継ぎを行うなら同一航空会社の便を選ぶのが第二原則となる。これらの提言は先進国の空路

に馴染んだ人々には、そう深刻には受取られないかも知れないが、この原則を守る限りトラブルは最小限に抑えられる筈である。

まづ簡単な第二原則から説明しよう。筆者の知る限りでも南回り空路で荷物を紛失した友人が多いがすべての場合に共通しているのは異った航空会社間の乗継ぎを行っている点である。クレームは二つ、あるいは三つの航空会社間でトライ回しされて、結局はアキラメざるを得なくなるのである。もし一つの航空会社なら、責任転嫁は不可能であるから荷物事故は殆んど発生しないし、また発生した場合の処置もスムーズである。次に第一原則に到達するに至った筆者の経験を述べよう。

旅行社が作ってくれたスケジュールによると、4月9日 SAS 機で羽田を発ち、同日夜10時カラチ着、同地に2泊して11日朝9時発の IA (イラク航空) 機でバグダードには正午ごろ到着の予定であった。カラチには予定通り到着し、通関後、接続サービスの手続きをするため直ちに SAS のオフィスへ行った。所が室内には誰も居らず、20分程待ってやっと現われた係員に話すと、即座にホテルのクーポンを作成し、親切にも、タクシー料金は6ルピー以上払う必要はないと云って立去った。もし彼が注意深い男であったら、あと4時間で私の乗るべき IA 機が出発することを教えてくれるべきであったのだ。旅行社を全面的に信用していた私はこの瞬間重大なトラブルが発生したとは露知らず、翌朝総領事館を訪問した後100km余り離れた Thatta の遺跡を見物に出掛けた。夕刻カラチ市内に戻り、イラク航空のオフィスで明日の便の再確認を求めた。驚いた事には、4月1日にスケジュールの変更があり、乗るべき飛行機はすでに早朝出発し、次の便は一週間後だと聞かされた。我が旅行社は、中近東の航空会社

* 塙 輝雄 (Teruo HANAWA), 大阪大学, 工学部, 電子ビーム研究施設, 教授, 理博, 電子工学

は4月、7月、10月に定期的にスケジュール変更を行うことを知らなかったわけである。

さて大変なことになった。調べると、一週間後の水曜日まで便はないし、その便も現在満席であるとのことであった。止むを得ず、翌日9時過ぎに領事館に行きできるだけ早い便の確保を依頼した。領事館側も驚いて、すぐイラク航空に確認の電話を入れてくれた。すると驚くべき返事が返ってきた。曰く“IA32便はスケジュール通り本日朝9時に出発した。我々はミスターハナワが現われないのでできるだけ待っていたのだ”と、これにはさすがの私も意表をつかれてしばらく物も云えなかった。念のためPIAに問い合わせてもらって、これがマッカなウソであることが判明したが、しばらくはウカツさを非難する雰囲気にも包まれてしまった。その後の経験や研究の結果、アラビア語圏では、一寸表現し難いが、“計らざるウソ”あるいは、“願望”と現実との混同といった傾向があるように思われる。後にイラクの諸都市を訪ねて気がついたことであるが、街角に立つ数少ない彫像はすべて詩人であって、如何にアラブの人々がレトリックを愛するかを感じさせられた。時として現実よりレトリックが優先することもあるのかも知れない。

当時は石油景気で、中東産油国行き便は出稼ぎや一旗組で満席であり、何らかの手を使わない限り一週間待っても席を確保できるかどうか疑わしい状態であった。我々大学人はこの方面の実技に欠けているが、緊急の場合は大いにチエを絞らなければならない。飛行機の予約は翌日、4日先の便(到着後丁度一週間後)が取れたが、私が単なる旅行者として、PIAの窓口で申し込んだとしたら、このようにスムーズには行かなかったことは確かである。何れにせよ初めから直行便に乗っていたならば、このようなトラブルは発生する余地がなかったわけである。またこの地域の飛行場は内外の政府要人が着発するとき数時間にわたって閉鎖され、通過する道路も通行禁止となることが常であるから、2時間位の乗継ぎ時間のマージンは簡単に消失しかねないということも判った。

計らずも4日のゆとりができたので、かねて

念願の地、モヘンジョダロの遺跡を訪ねることができ、強い印象と深い感動を得ることができた。実は、この地を訪れるかも知れないと漠然とした予感を持っていたが、このような形で実現することは夢にも思わなかったことである。回教徒に言わせれば“アッラーのめぐみ”であったのかも知れない。

以上は空路の話であるが地上にはタクシー運転手という手強い連中が待ちかまえている。最良の策は、標準的な料金を調べておいて、乗る前に断固として値切ること、料金が折合わなければ乗らないまでである。客待ちの車はいくらでもいるので、急ぎさえしなければ客の勝である。注意すべきことはメーターが付いている車でも、乗る前に料金の取決めをしておかねばならない事、これを怠ると法外な料金を要求されることになる。ただし、値切るといっても、深夜とか早朝、飛行場へ行く場合のように、こちらにどうしても乗らねばならぬ弱味がある場合は別である。こんな場合は絶対に成功しないと云ってよい。我々日本人は云い値通りの料金を払う寛大な金持ちと見做されているが、この地において、値切らないのは、相手をスポイルし後からくる旅行者に迷惑を及ぼす罪悪と考えるべきである。

最後に国際電報は少くとも3日位の余ゆりを持って打たなければ、全く役に立たないこと、電話連絡も忍耐が必要であることを加えておかねばならない。

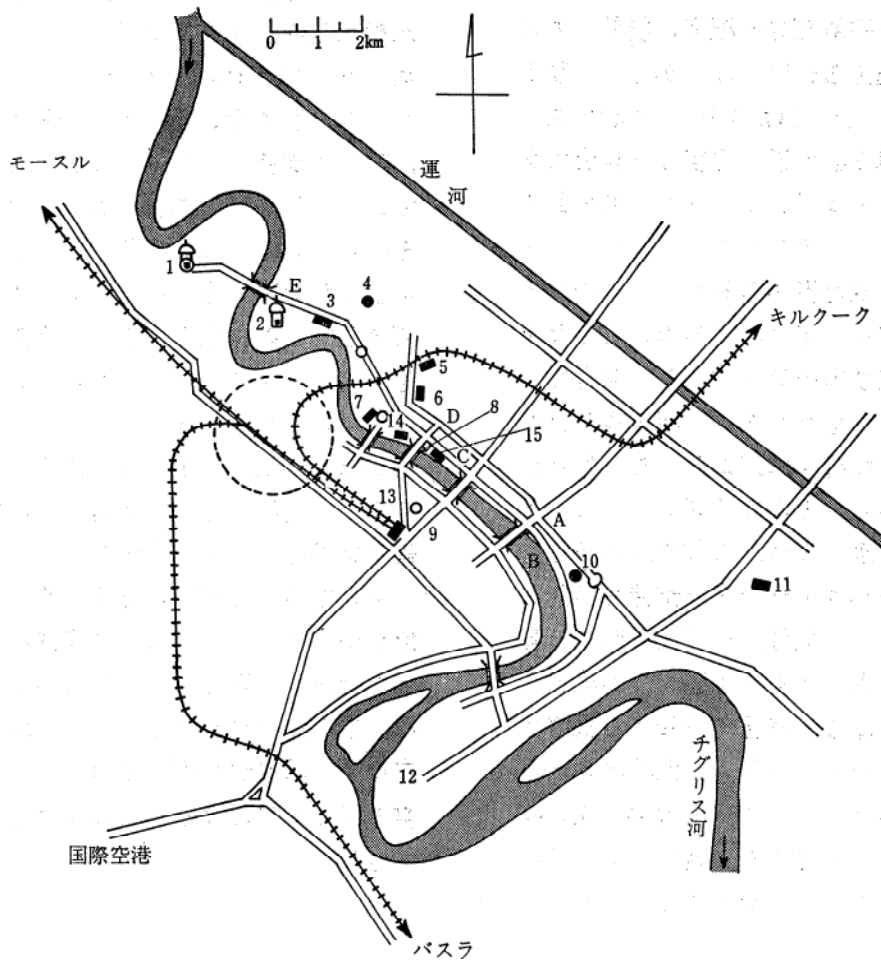
2. バグダード

バグダードはアッバース朝第2代のカリフ、アル・マンスールが762年直径約2kmの正円形の城壁で囲まれた都市を建設し初めた時までさかのぼることができる。この都はイスラーム帝国の首都として平安(サラーム)の都と名づけられ、第5代のカリフ、ハールーン・アル・ラシードの時代(786—809)に繁栄の頂点に達し、文化の華が開き1258年モンゴルのフラグ汗の軍勢によって徹底的な破壊をうけるまで世界の文化の中心の地位を保ったのである。我が国では桓武天皇が京都に都を移し平安の都と名付けたのは794年で、ほぼ同じ時期に東西に平

安の都が出現したことは興味深い。バグダードの場合、イスラームの教え“アッラーは平安の宿に誘い給う”に因んで名付けられたのであろう。

古い地図を頼りにして現在のバグダード市に円形城の場所を示せば地図の点線の円附近に当ると思われる。ティグリスは度重なる洪水により流路を若干変えていると思われるので必ずしも正確とは云えないが西岸から町が形成されて行き次第に東岸に活動の中心が移動して現在に至っている。官公庁、商業の中心は円型城の対

岸附近から最初の弯曲点附近までの狭い地区に集中し、市街地は兩岸にそれぞれ約2kmの巾をもっている。その外周は、郊外の住宅地となり現在約300万の人口(イラクの人口は約1千万)がこの地に集中し、絶えず膨張している。現在のイラクを語る場合、1920年に初まる英国の委任統治の影響は無視できない。形式的には、1932年イラク王国として独立した時に統治は終わった筈であるが、1958年の革命で共和国となった頃まで約40年にわたって大きな力を及ぼしてきたのである。電力は50Hz 220Vであり、繁

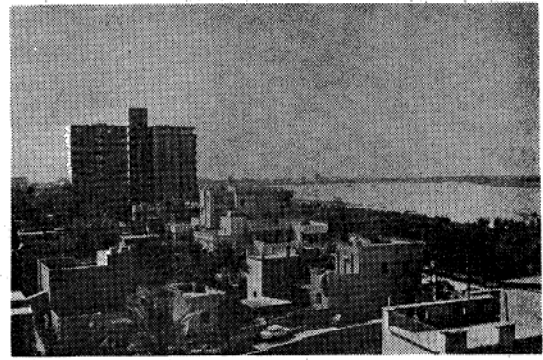


バグダード市街略図

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1 Kadhimain Shrine | 11 University of Technology |
| 2 Adhamiya Mosque | 12 Baghdad University City |
| 3 College of Science | 13 Railway Station |
| 4 College of Law | 14 Abbasid Palace |
| 5 College of Economics | 15 Al Mustmsiriya |
| 6 College of Engineering | A Sa'adun St. |
| 7 College of Medicine | B Abu Nuwas St. |
| 8 Marjan Mosque | C Rashid St. |
| 9 Iraqi Museum | D Jumhuriya St. |
| 10 Baghdad Hotel | E Imam Al Adham St. |

華街であるラシード通りはロンドンのリーゼントストリートを連想させ、インテリはキングズイングリッシュをしゃべり、指導者層は殆んど英国で高等教育を受けており、現在でも毎年百人以上の留学生を英国に送り出している。といった具合である。

次に気候風土や生活の実状を紹介しよう。私が初めて訪れる前に聞いた話で、一番強い印象を受けたのは“バグダードは、すべて砂ホコリの色一色で、モノクロームの世界です”というものであった。またカツオブシやノリが忽ち粉末と化する極乾燥の酷熱の地であるとも聞いた。理科年表には平均気温や湿度の統計があるが、実感として把握するわけには行かない。私が初めてこの地を踏んだのは4月の中旬であった。カラチでは連日40°C近く湿度は10%台であったがそれ程暑いとは思わなかった。領事館で“バグダードの暑さはカラチの比ではない”と聞かされていたが飛行機から降りた時はむしろ爽かであった。迎えの車は半ば沙漠のような島地の間を約15km走り市街地へ入った。間もなく忽然として満々と水をたたえた大河と緑したたる木々、色鮮やかな花々に迎えられた。何と美しい町であろうか！ その昔イブン・ジュバイルが、チグリスの水と大気から匂やかに咲きいでた美女のあでやかさとたたえた気持ちが忽ち理解できたのである。気温は35°C位しかなく乾燥しているので背広・ネクタイ姿で汗が流れることはない。夜になると気温は急降下し肌寒さむら感じる。ではモノクロームの世界は本当の話なのであろうか？ バグダード大学の友人に聞くと、それは7、8月ごろの話で、その頃は気温は50°Cに達することも稀ではなく、木々の



バグダードホテルよりチグリス下流を望む

葉は落ち、砂ホコリが襲来するのだそうである。この時期は日中、道路を横断するとき、10m離れた横断歩道まで行く気がしないとの事であった。10月に訪れた時はチグリスの水は痩せ、至る所に生い茂るナツメ椰子の実(デーツ)が熟して黄色く、たわわな房となつてたれ下っていた。しかし、美女のおもかげは幻の如く消え去っていた。日中の気温は36°Cで、突きササルような太陽の光を浴びても、大阪の夏と比較できないしのぎ良さである。余談ではあるが、生のデーツを初めて食べたなら、日本の渋柿とそっくりの味で全く驚いた。12、1、2月は冬で雨が降り、気温は零下10°C位まで低下するそうである。結局真夏の2カ月を除けば、むしろ快適な気候と云えるかも知れない。

写真を見れば住宅の屋上の胸壁が高いことに気がつくと思うが、これは真夏には屋上にベッドを持出して寝るためである。島大使の話では、屋内は熱気がこもっているが、屋上では毛布なしでは風邪を引く程涼しく、降るような星空の下で寝るのはまことに快適であるとの事であった。(つづく)